

研究結果報告書

所属 福建師範大学社会歴史学院

役職 講師

氏名 林 曉萍

【研究テーマ】

20世紀初中国の「以夷制夷」外交政策と日本－勢力範囲を中心に

【研究結果】

本研究は、日本の在華勢力範囲問題を切り口として、二十世紀初頭における中国の「以夷制夷」外交政策を全面的に考察したものである。二十世紀初頭における中国の対日政策の制定背景には、義和団事件以降、日本が中国における勢力を拡大し、福建省、「南満東蒙」（中国東北南部及び内モンゴル東部）、山東省といった広範な勢力範囲を持つようになった状況があった。独自の力で日本に対抗できない中国政府は、他国との連携によって日本を牽制する外交政策を模索した。

一年以上の研究を経て、筆者は以下の結論を得た：

まず、外交政策の視点から見ると、清朝末期と中華民国初期の外交政策には連続性が見られる。これは、清朝末期から中華民国初期までの中国の外交環境には大きな変化がなかったこと、そして袁世凱ら「以夷制夷」外交政策の支持者がこの時期に再び政権中枢を占めていたことが要因として挙げられる。また、中国の外交政策は秘密裏に実行されていたが、日本政府は各国の駐在員で構成される情報網を利用し、中国の外交動向を比較的正確に把握していた。さらに、自国の在華勢力圏の拡張、特に「南満東蒙」地域の勢力拡張を抑制しようとすることを根本的な目標とする中国の聯盟外交に対して、日本政府は警戒心を持ちつつ、対応策として一連の外交行動を展開していった。

本研究では、二つの課題が残されている。

一つ目は、日・中両学界では近代中国の聯盟外交政策問題（例えば「以夷制夷」「遠交近攻」「合縦連衡」など）について、体系的な整理が行われていない点である。

二つ目は、近代日本の在華勢力範囲問題についても、深く研究されていない点である。

筆者は以上の課題を踏まえ、今後さらに研究を進めていきたいと考える。二〇二三年から二〇二四年にかけて、筆者は北京大学歴史学専攻で博士号を取得し、大学教員になった。ここで、住友財団が若手研究者に対して学術研究の支援を行っていることに深く感謝申し上げる。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表(題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

1、林曉萍、「『合謀之局』」の再編成——清末の連盟外交に対する日本の対処策（1909—1912年）」、「『新史料と近現代中外関係』学術会議」（主催：武漢大学）、2024年8月24日—27日、中国武漢、武漢大学。

2、林曉萍、「『分』と『合』の狭間：孫袁と民国初期による『聯日』外交の試み（1912—1915年）」、「辛亥革命共同研究班例会 第二十四回」（主催：華中師範大学）、2024年9月6日、中国武漢、華中師範大学。

3、林曉萍、「『分』と『合』の狭間：孫袁と民国初期による『聯日』外交の試み（1912—1915年）」、「史学会大会 第122回」（主催：東京大学）、2024年11月9—10日、日本東京、東京大学（本郷）。

論文(題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

1、林曉萍、「『合謀之局』」の再編成——清末の連盟外交に対する日本の対処策（1909—1912年）」、「（中国）『湖北社会科学』（投稿予定）。

書籍(題名・著者名・出版社・発行時期等)